普及課だより

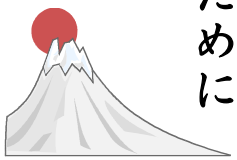
No. 45　2018.1

東三河農林水産事務所農業改良普及課
（東三河農業普及指導センター）

〒440-0833　豊橋市飯村町高山11-40
TEL：(0532)63-3529　FAX：(0532)63-7023
Web：http://www.pref.aichi.jp/nourin-higashimikawa/higashimikawa-fukyu/

東三河農業の維持・発展のために

課長　杉浦　英博



新年明けましておめでとうございます。健やかな新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。日頃から愛知県政及び愛知県農業行政にご理解とご協力をいただき職員一同厚くお礼申し上げます。

昨年は9月まではやや高温傾向ながら順調な天候で、管内の主な作目である野菜を中心に豊作による価格低迷が心配されましたが、10月になると一転して曇雨天が続き、日照不足及び2つの台風により大きな被害を受け、現在もその影響は大きく残っています。農家の皆さんの生産している農畜産物はいうまでもなく国民の大切な食料であり、生活に潤いを与えるものです。消費者ニーズの高い国産農畜産物を、このような天候不順な年であっても安定して台所に届ける努力を続けなければなりません。輸入に頼らない足腰の強い農業の確立が全国的な農業地帯であるこの東三河地域の責務であり、職員一同も支援を続けていきますのでともに研鑽していきましょう。

さて、視点を日本の将来に向けてみますと、高齢化と人口減少が大きな課題で、管内においても、既に豊橋市、蒲郡市の人口は一昨年に比べて減少しています。ただ、愛知県全体の人口はまだまだ増加し、管内の農産物が多く輸送されている関東は人口の集中が進んでいます。一方、人口減少よりも早いペースで農家の減少が進み、最近では価格低迷もほとんどありません。高齢化、担い手不足、耕作放棄地の増加といった言葉は会議冒頭のあいさつでよく使われています。管内は農業を行う人々にとって自然・社会環境が優れており、国の施策もあってか農業を志す新規参入者の相談は多く、既存農家の規模拡大意欲も高いと思われます。管内には人手を要する園芸産地が集積しているものの、一般企業の求人活動も活発で、農家にパート職員が集まらず、産地の維持・発展が阻害されています。手間のかかる収穫・調製作業の機械化など少しでも労力を削減できる方法を検討していく必要があり、基礎データの収集など当課としても支援していきます。

農業改良普及課は今後とも関係機関と密接な連携を図りながら地域農業の発展に寄与していきますのでよろしくお願いいたします。

農業経営士等の認定者紹介　※敬称略

農業経営士

【豊橋市】安藤　恭崇（果樹）

【豊橋市】大澤　利充（露地野菜）

【豊橋市】村田　剛大（施設野菜）

【豊橋市】伴野　明（施設野菜）

【豊川市】山口　勝彦（施設野菜）

農村生活アドバイザー

【蒲郡市】小林　利彰（果樹）

【豊橋市】日比　久恵（水田作）

【蒲郡市】小嶋　智明（果樹）

青年農業士

【豊橋市】中林　主税（施設野菜）

【豊川市】山本　一徳（花き）

【豊川市】金田　将始（花き）

【豊川市】鳥居　和矢（水田作）

【蒲郡市】大村　明洋（果樹）

【蒲郡市】杉浦　淳史（果樹）

【蒲郡市】羽田野　崇弘（果樹）

管内農業の話題

宝飯豊橋養豚青年研究会が消費者との交流会を開催

宝飯豊橋養豚青年研究会が平成29年11月25日（土）に東三河農業改良普及課にて「消費者と若手養豚農家との交流会」を開催しました。

この研究会は養豚農家と農業改良普及課が若手養豚農家の育成の場として平成7年に設立した組織で、毎年、消費者との交流会を開催しています。豚肉の生産流通の理解促進と、より良い豚肉生産に向けての消費者からの意見収集を目的に、研究員が楽しい企画を考え、第16回目となる本年も、60名の定員を大きく超える129名の親子の応募がありました。

当日は食肉加工アドバイザーによるソーセージつくり体験、みかわポークの試食、研究会会長、ＪＡ愛知経済連、豊橋市食肉衛生研究所職員による養豚の生産現場と検査・流通に関する学習会等を行いました。

参加した消費者からは「ソーセージつくりが家族で楽しめて良かった」「安全安心のために農場や検査所で様々な取組が行われているのを知ることができた」などの感想があり、養豚や「食」について考える子機会を提供することができました。

ソーセージつくりの様子

あぐりログによる施設内環境のモニタリングが進行中

東三河管内の施設農家では、「あいち型植物工場導入推進事業」を活用して「あぐりログ」の導入が進んでいます。

「あぐりログ」は、愛知県農業総合試験場とＩＴ企業が共同で開発した施設内の温湿度や炭酸ガス濃度をモニタリングし、スマートフォンで手軽に確認できるシステムです。今まで見えなかった施設内環境の変化を見える化することで、作物に適した環境に制御することが可能となり、収量向上や病気の発生を防止することが期待されています。

平成28年度からの2年間で「あぐりログ」は7品目133戸の生産者が162台を導入し、のべ11の部会で研究会活動が行われています。生産者が中心となって施設内環境が生育や収量にどのように影響しているかを調査し、今後の栽培管理に活かして行きます。

生育を調査する生産者

新しい技術の紹介

小麦新品種「ゆめあかり」の栽培技術の確立

豊川市で栽培している小麦品種は、日本麺用の「きぬあかり」が大部分ですが、パン・中華麺用硬質小麦「ゆめあかり」（今年度、県奨励品種に指定）の方が経営所得安定対策の畑作物の直接支払交付金を多く得られます。しかし、「ゆめあかり」は蛋白質含量を高めるために4月の実肥施用が必須で、農家にとって田植え準備と作業時期が重なることが課題でした。

そこで、平成29年作では「ゆめあかり」の栽培において、元肥として農業総合試験場が開発した実肥時期の肥効成分を含んだ肥料（以下、ゆめあかり専用肥料）を使用して、実肥施肥作業を省略する栽培技術の現地適合性試験を行いました。

ゆめあかり専用肥料を元肥に使用した試験区と、慣行の施肥体系である慣行区では、収量には大きな差はありませんでしたが、蛋白質含量は試験区の方が慣行区よりも高くなりました。試験結果を農家に説明した結果、豊川市の「ゆめあかり」の栽培面積は、平成29年産の5haから、平成30年産は13haへと増加しました。

試験区の成熟期の様子